

KOMAZAWA 駒澤大学 4×0 高知大学 HI

前半 12 分立ち上がりの悪い流れを断ち切るゴールを突き刺した関。大臣杯決勝以来のゴールはチームを波に乗せる一発となった
(野澤俊介撮影)



高知大を玉砕 予選リーグを勝利で締めくくる

決勝へ明と暗の収穫

この日、第一試合で東北学院大が亜大に勝利し、駒大の予選リーグ1位通過が決定したため、この高知大戦は消化試合となってしまった。モチベーションの低下が懸念されたが「引き分けとか負けるとか考えないで、勝つことを意識していった」(原)。決勝トーナメントに繋がる、内容のある勝利が求められた。

高知大は駒大を意識してか、前線に2人を残す以外は全て自陣に引き、ゴール前に人数を割く守備的な布陣を敷いてきた。このため駒大は余裕を持ってボールを保持するものの「最後の仕掛けの部分で創造性を欠いた」(小林亮)。立ち上がりになってしまった。しかし12分、関がチームを救った。中後からのパスを受けると、切り返して、ペナルティエリア外から、コースを狙った技巧的なシュート。序盤に奪ったこのゴールで、駒大が試合の波に乗った。得点にこそ至らなかったが、「後から自分が出たければチャンスが生まれるかなと思っただ」と小林亮が前線に顔を出してシュートを放つなど、積極的なプレーも垣間見られた。前半を折り返す。

後半、高知大は前半とは異なり、ディフェンスラインを浅めに設定する。しかし、結果的にこの戦術は駒大の波状攻撃を許すことになる。原がスピードを生かして再三突破を試み、また「前半のシフトが利いて、相手があまりつないでこなかった」(中嶋)。前半以上に駒大ペースで試合が進む。60分、中嶋からのスルーパスを受けた原が約40メートルを独走。3試合連続ゴールをあげると、76分、またも原が左サイドを突破。シュートのこぼれを巻が押し込み勝負を決めた。

立ち上がりの悪さなどは相変わらずの課題だが、格下相手とはいえ、原の復活や無失点で乗り切った守備陣など、収穫の多い予選リーグでもあった。今後戦いの場を移す決勝トーナメントについては「自分たちの速いサッカーを前半から徹底できれば、強い相手でも後半勝負ができる」(中嶋)。近年90分間での勝利のない阪南大相手に自分たちの「速い」サッカーができるか注目したい。

(遠藤雅之)